小説

吉原志

関根弘

小説

吉原志

関根弘

小説吉原志

昭和四十六年四月十二日第一刷

著者＝関根　弘

発行者＝野間省一

発行所＝株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京九四五―一一一一大代表　振替東京三九三〇

印刷所＝信毎書籍印刷株式会社

製本所＝黒柳製本株式会社

定価＝六九〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©関根　弘　一九七一年

0093-148959-2253 (0)　　(文2)

小説吉原志　目次

第一部　吉原従業婦組合　七
第二部　わたしの吉原志　一三九

裝幀　灘本唯人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小説　吉原志

第一部　吉原従業婦組合

一

山田菊江のアパートは三輪（みのわ）のあたりにあった。いま訪ねていこうと思っても、どういけばいいのか、正確にはもちろん、おおよその見当もつきかねる。電気を節約するためであろう。暗い、細長い片側廊下であった。マッチ箱のように仕切られた一室だった。

三輪は、昔、箕輪と書いた。吉原の遊女が静養する寮があった。遊女が妊娠するのは困るにちがいなかったが、しかしそれは避けることのできない人間の生理なので、そのようなときのために吉原の妓楼では、ごく近いところ箕輪付近に遊女静養のための寮をつくり、そこへ一時移すようにしていた。吉原の寮ときけば、洒落た閑雅な佗住居が目に浮かんでくるが、現代人のわたしには、工場などの寮の悪いイメージもある。

その三輪に山田菊江が鳴りをひそめていたのは偶然でなかったかもしれない。そこにどんないやな思い出があったにしても、人間にとって住みなれた土地は滅多なことで捨てられるものではないからだ。

型通り茶が入ったとき、ドアがコツコツとノックされた。山田菊江は立ち上がり、ドアの外で男の声がした。低いがしかし響の強い声で応対している。しばらくつづく。簡単におわりそうになかった。待つ身にとっての無限につづく囚われのなかの時間……

来意はあらかじめ告げてあった。他人の世話を焼くことがすこしも苦にならないというよりそれが生甲斐でもあるかのような初老の小母さんの紹介と案内だった。

「たいへん、真面目につとめてくださいまして、わたしどもハリアイがあるのでございます。山田さんのような方はすくないですねェ」

ひっつめ髪。ツーピース。公務員とは思えない。しかし婦人相談所の相談員だった。そういえば山田菊江の第一印象も下町のどこでもみかける中年の小母さんにすぎなかった。すこし潔癖にみえるようなところも、前歴を知らなければ格別目立つものではなかろう。赤線の灯が消えたのは、昭和三十三年四月一日。売春防止法が実施された日からだが、その赤線の灯が消えるまで、彼女は新吉原女子保健組合の組合長だった。ことわるまでもなく接客婦だった。

「待たせちゃって……。もう来ちゃいけないっていうのに、あの人、しつこいんだから……」

ドアが閉められ、山田菊江がもどってきた。鼻先にドアをピシャンとしめられ、すごすご帰っていった男の後ろ姿が目にみえるようであった。わたしたちが訪ねてきたので、わざとつれなくしたのだろうか。その思いを同行のプロデューサーがたちきった。彼は、売春防止法が実施されてからはじめての正月を迎えた。法の精神は生きているかどうか、各方面の意見を集めていると番組の趣旨を説明した。それはすでに相談員から彼女につたえられている内容と変わりない筈だが、それをもう一度くり返し、わたしがマイクを差し出す番がきた。

「正業につくということはむつかしいことですか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「自分の本心から立ち直らなければ、苦しけりゃ、やっぱりやっちゃうよ。誰だってねえ。だいいち、住む家がないんだもの。やるよりしようがないじゃない。こんなアパート借りたって三万もかかるんでしょ」

アケスケな答えがかえってきた。相談員の紹介だからといって遠慮していない。面当てのようにいっているようでもあった。

「礼金とかね」

「三万よ。あたし、三万でもって、八百五十円おつりだ、ここ……」

「家賃は？」

「四千円」

「四畳半でね」

「太陽商会に一万四千円っていうのポイってとられちゃったでしょ。そいで敷金が、ここを出るときにもらえるのが一万一千円いっているわけだ。大家さんにね。それから前家賃四千円と雑費……旅館にいる人は勤めで使わないから……普通のまじめな家では、会社ではぜんぜんダメ。家があってはじめて使うんでしょ。家のない人なんかやつらなんて使いませんよ」

元組合長はポンポンいった。歯に衣きせなかった。一日の疲れと一緒にこれまでの不満を一挙に吐き出しているようだった。相談員が口をさしはさむ余地はなかった。彼女にとって対世間はやつらであった。対世間ルートのパスポートを手に入れるためにまず家と名

のつくものに彼女は住まわなければならなかった。旅館住まいは住所不定扱いで住民登録がとれない。市民として登録されないかぎりどんな零細な町工場でも正規の労働力として認めない。そこで世間の関門には不動産屋が地獄の門番よろしく突っ立っていてまず第一に彼女のふところから家の契約金その他を巻き上げたのだ。

「いま、オモチャ工場でしょ。朝六時に起きて、そいで六時半までに御飯炊いて、掃除して、ちゃんとこうやって出ていくんだからね。いつ帰ってきてもいいように。そいで六時だからね、夕方の」

「どのくらいもらえるんですか？」

「二百十五円」

「それで食べていけますか」

「いかれない」

「どうしてんですか」

「いままではあそこにいたんで、ずうっと四年もつきあってる人がまあ面倒をみてくれたけど、奥さんも子供もあんの」

「パトロンですか」

「パトロン面ないよ。だらしがなくて。奥さんと子供があって、養子でしょ。とってもこれが自由になんなくなっちゃった」

指でマルをつくった。インタビューをはじめる前、ドアの外で追い払われた男がその養

子だとわかった。世間はカネだ。そうならばあたしたちもカネの論理にしたがわなければならないというわけか。
「いままでこれが自由になったの。去年の十一月までは。だからいまみんな質屋に入っているわ。恥ずかしい話だけど。オーバーだけならいいけど、扇風機まで入っちゃってるわよ。今度の生活するのに」
「ああ、この生活するのに」
「ん、無駄に使ったんじゃないよ、一銭だって。みんな品物はもってるんだから、買わなくたって」
「結局、まあ、なんていうか、食い込みになってるわけですね」
「食い込みにしちゃったのよ、ねえ」肩と声を落した。「これから買える見込があるんだったらいいけど、あてもないのに流しちゃったらね、もう買えないし、また悪い道に戻らなくちゃなんない。金ならねえからやっちゃえってことになっちゃうでしょ。それが恐ろしいのよ、あたし、自分で。自分の気持で恐ろしいの知ってるから……」
「でも、あの商売も病気が怖いでしょ」
「そりゃ平気！」思いがけないハリのある声だった。「洗滌をきちんとすれば大丈夫。病気にかかる人はちゃんと洗わないのよ。洗いかたにもコツがあんの。奥からしぼりだせばまちがいない」
下町のどこにでもみかけられる小母さんは、とたんにプロの意識に、組合長の意識にも

どったようだ。世間も自分も悪い道だと思っている道での自信がみえた。性病予防の意味がそれほどないとすれば売春防止法の目的はなんであったか。彼女たちの職場はそのまま住居だった。その職業が公認されなくなった結果、たちまち彼女たちは住む場所をうしなった。解放というよりは追放ではないか。わたしはあらためて部屋をみまわした。いぜんの職場から移動してきた家具は、いぜんの住居よりみすぼらしい部屋に移ってきて、主人どうよう当惑しているようにみえた。売り食いの果に待っているもう一つの運命は……。

しかしそのときこちらも職業意識の枠を越えることはなかった。インタビューがおわれば仕事はおわりで、録音器(デンスケ)からマイクをはずし、まあしっかりやってくださいと、紋切型の激励でお茶をにごし帰りかけた。

「ちょっと待って」

そのうしろから山田菊江が呼びとめた。タンスの引き出しを開けて、新聞の束をとりだした。

「これ、吉原の組合で、あたしたちが出していた新聞なの。持っていてもしょうがないから、あげるわ」

思いがけないお土産だった。タブロイド判で、三センチくらいの厚みがあり、紐で綴じてあった。吉原の女が出していた新聞、腐ってもタイだ。いつかかならず役に立つ。トピック的にかんがえた。

「えッ、もらっていいんですか」

よろこびをかくすことができない。声が上ずった。
「持ってって」
こんなものをもっているから過去への未練がたちきれないのだと思いついたようてもあるし、いいたいことはみんなここに書いてあるのだという思いをこめたようにも受けとれた。
「では遠慮なくいただいて、あとでなにかお礼をします」
嬉しかったが、帰りがけで浮足立っていた。さっとタイトルに目を通し、無造作に筒状に丸めて表に出た。
その貴重な新聞をわたしはなくしてしまった。

過ぎ去った日付はよくみえるが新しい日付の周辺はよくみえない。ときどき部屋のなかの新聞を整理して失ったタブロイド型の新聞を思い出した。山田菊江はわたしになにかを託す気持があったのではないか。肝腎の新聞に目を通していないので忖度しかね、いらいらする。逃がした魚は大きくみえるということではないかと新聞の値打ちを否定してなぐさめてもみたがいつか思いがそこに帰る。いっそ山田菊江に会っていないことにした。録音構成の取材をしたこともなかったし、帰りがけに彼女から新聞を貰ったこともなかったのだ。記憶からとりのぞいた。しかし悪魔は忘れたころにやってくるのだった。
「ウチの雑誌は赤線てタイトルつけないと売れないんで、編集長がいつも赤線のこと書か

せるんです。赤線知らないんで、異常な興味もってるんですね、いまの若い人……なんか材料ないですかねえ」

大衆雑誌の編集者だ。オレはいい材料をもっている、いやもっていたのだと思った。しかし折角手に入れた宝物のような資料は、ミュージカル映画『オリバー』の泥棒が手に入れた財宝のように水の底深く沈んでしまったのだ。他人の不幸を思って自分の不幸も諦めるほかはなかった。

山田菊江の四千円のアパートを訪ねたころ、わたしはそれよりましな五千二百円の部屋に住んでいた。貰った宝物はその押入れに投げこんであった。そこに住んでいたかぎり宝物は無事だった。どの辺りに投げこんでおいたかまでかなり明瞭に思い出すことができる。その部屋でわたしはさいしょのカミさんと名がついた女と別れ、二番目のカミさんと知り合った。心機一転して世帯をもつことになった。この引越しのドサクサに宝物は行方不明になった。わたしがぜんぶ引越しの荷物を手がけていれば不手際は演じなかった筈だがなまじカミさんの整理能力にたよったばっかりに悔いを千載にのこすことになった。だがカミさんを恨んでもはじまらない。恨むなら政府を恨まなくてはならないのだ。一畳当り千円とか千五百円とかいう相場をつくりだした政府の住宅政策の貧困に山田菊江の、ひいてはわたしの不幸が集中的に表現されているといわねばならなかった。引越しのときわたしは一篇の詩を書いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com